

書誌情報

論 題：Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註 (1.1)

よみ：しゃたぱたぶらーふまなやくちゅう(1.1)

英文タイトル：Śatapatha-Brāhmaṇa 1. 1 : Japanese Translation with Notes

著 者：古宇田 亮修 (KOUDA Ryōshū)

初 出：『大正大学大学院研究論集』第 21 号，March, 1997, pp. 238–217.

キーワード：シャタパタ，ブラーフマナ，ヤジュル・ヴェーダ，新月満月祭，古代インド

Keywords : śatapatha, brāhmaṇa, yajur-veda, darśapūrṇamāsa-iṣṭi, Ancient India

インターネット版：PDF 形式，2004 年 10 月 08 日 ver. 1.00

注記：初出の後註形式を脚注形式に変更いたしました。またレイアウト変更に伴い，ページ番号が変わっておりますので，引用の際はご注意願います。翻訳は節番号，註は註番号での引用を推奨いたします。

HP アドレス：<http://www015.upp.so-net.ne.jp/sanskrit/index.htm>

Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註 (1.1)

古宇田 亮修

はじめに

仏教興起以前のインドの宗教思想および言語文化を研究するための文献資料としては、ヴェーダ (Veda-) と呼ばれる一大祭祀文献に匹敵するものは存在しない。本論文は、その中から、Yajur-Veda の Brāhmaṇa 部分に位置する部分に位置する “ Śatapatha-Brāhmaṇa ” (以下 ŚB.) (全 14 Kāṇḍa から成る) の冒頭部分 (Kāṇḍa 1. Adhyāya 1) の翻訳とそれに対する筆者の文献学的註を一資料として提供するものである。ŚB. という名称は「百の道から成る Brāhmaṇa」を意味するが、これは ŚB. が百の Adhyāya 「課、教程」から成ることに由来する。また、ここでいう Brāhmaṇa とは、「Yajñá/ Mántra に存する brāhmaṇ (真言力、祈祷力) についての解説」と解しておけば大過なきものと思われる。この翻訳においては Manta 部分を二重鍵括弧でくくり、Brāhmaṇa 本来の解説部分と区別した。

現存する学派 (Śākhā-) が一派しかない R̥g-Veda と違って、Yajur-Veda には独自の Saṃhitā/ Brāhmaṇa を有する諸学派が並立している。現存する学派は黒 (Kṛṣṇa-) Yajur-Veda か、白 (Śukla-) Yajur-Veda のいずれかに大別され、ŚB. は、白 Yajur-Veda の Vājasaneyin 派に所属する。Vājasaneyin 派の下には Kāṇva 派、Mādhyandina 派、Kātyāyana 派の 3 派が数えられるが、現在出版されている ŚB. のテキストは Kāṇva、Mādhyandina 両派の伝本である。今回、筆者が底本に用いたのは Mādhyandina 派の伝本であるが、Kāṇva 派伝本の対応箇所 (2. 1. 1-3) も随時参照した。今回参照したテキストとその略号は以下の通りである。

略号 B. : *Mādhyandinaśākhīyaṃ Śatapathabrāhmaṇam*, intr. by Dr. B. B. Chaubey, *Bhāratīya-Vidyā-Prakāśan, Vārānaśī, 2vols, 1989.*

略号 G. : *Shrimad-Vajasaneyi-Madhyandin Shatpath-Brahmanam with Vedartha-Prakash Commentary by shrimatrayibhashyankar Sayanacharya and sarvavidyanidhana kavindracharya sarasvati Shri Hari Swami*, ed. by several learned persons, printed and published by Gangavishnu Shrikrishnadass, Kalyan-Bombey, 5vols, 1940.

略号 K. : *Śuklayajurvedāntargatamādhyandinaśākhīyaṃ Śatapatha-brāhmaṇa*, ed. by Cinnasvāmīśāstri and Paṭṭābhirāmaśāstri, *Kāśī Saṃskṛta Granthamala 127, Vārānaśī, 2vols, (1937-) 1950.*

略号 W. : *The Śatapatha-Brahmana in the Madhyandina-Çakha with extracts from the Commenaries of Sayana, Hariswamin and Dvivedaganga*, ed. by Dr. Albrecht Weber, 1855 (rep.1964).

略号 ŚBK. : *The Śatapatha-Brāhmaṇa in the Kāṇvīya Recension*, edited for the first time by Dr.

W. Caland, Revised by Dr. Raghu Vira (Three Vols. bound in one), Motilal Banarsidass, 1926 (rep. 1983).

略号 VS. : *The Vājasaneyi-Saṃhitā in the Mādhyandina and Kāṇva-Śākhā with the Commentary of Mahīdhara*, ed. by Dr. Albrecht Weber, 1852 (rep. 1972).

略号 VSU. : *Śrīmad-Vājasaneyi-Mādhyandina-Śuklayajurveda-Saṃhitā with the Mantra-bhāṣya of Mahāmahopadhyāya Śrīmad-Uvaṭācārya and the Veda-dīpa-bhāṣya of Śrīman-Mahīdhara*, ed. by Wāsudev Laxmaṇ Śāstrī Paṇṣīkar, Bombay, 1929.

以上のうち完全な Sāyaṇa 註を含む ŚB. は G. のみであるから，G. を中心にローマ字化したテキストを作成し，それを底本に用いた。紙幅の都合上，テキストは掲載しえないので，意味に関わる場合を除き異読を指摘することは控えた。

また，今回の翻訳に当たっては以下の訳業を参照したが，このうち，Eggeling による全訳は現在の時点においても参考に値するものである。

略号 Eggeling : *The Śatapatha-Brahmaṇa according to the text of Mādhyandina School*, translated by Julius Eggeling (Sacred Books of the East vol. 12, 26, 41, 43, 44), the Clarendon Press, 1882-1900.

略号 Weber : Der erste adhyāya des Çatapatha-Brahmana (ZDMG. 4. 289–301), 1850 (*Indische Streifen von Albrecht Weber*. Erster Band, 1868, pp. 31- 53).

湯田豊，「シャタパタ・ブラーフマナ 第1書，第1アディヤーヤの翻訳」(神奈川大学 <人文学研究所報> No. 18, 1984, pp. 39–55) .

Mādhyandina 派所伝の ŚB. Kāṇḍa 1 は，‘Haviryajña’ 「焼供による祈献」と名づけられ，一般に ‘Darśapūrṇamāsēṣṭi’ 「新月満月時に行われるイシュティ」と呼ばれる祭祀を主題としている。但し実際には，新月・満月の日には Upavasathā と呼ばれる予備儀礼が行われ，その翌日が祭日となる。この祭祀の内容については既に詳細な研究が為されている¹⁾ので，そちらを参照されたい。

¹⁾ Alfred Hillebrandt, *Das Altindische Neu- und Vollmondsopfer in Seiner Einfachsten Form*, Jena, 1880 ; *Śrautakośa*, vol. I, English Section Part I, Poona, 1958 (pp. 211–501); Urmila Rustagi, *Darśapūrṇamāsa (A Comparative Ritualistic Study)*, Delhi, 1981 ; Musashi Tachikawa, “The Structure of the Darśapūrṇamāsa” (*From Vedic Alter to Village Shrine*, pp. 239–268), National Museum of Ethnology, 1993.

翻 訳

1.1.1.1 まさに誓戒を遵守しようとしている者²⁾は、献供火³⁾と家長火⁴⁾との間で東に向かって立ちつつ、水に触る⁵⁾。彼が水に触るのは以下の理由による。虚妄⁶⁾を語るとき、人は実に祭礼に適さないものとなる。それ(妄言)によって、内面に腐敗が[生じるから]、実に水は祭礼に適したものである。「祭礼に適したものとなってから、誓戒を遵守しよう」と[彼は願う]、実に水は濾過具⁷⁾である。「濾過具で浄化してから、誓戒を遵守しよう」と[彼は願う]、実にそれゆえに、彼は水に触る。

1.1.1.2 [ゆえに]彼は祭火⁸⁾のみを見つめつつ、誓戒を遵守する 『誓戒の主、アグニよ！ [われは]誓戒を実行せん。[われが]それに耐えうらんことを。われにそのの成就あれ！』(VS.1.5a)と[唱えて]、実に神々の誓戒の主はアグニである。まさにその[アグニ]のために彼はこのように唱える 『[われは]誓戒を実行せん。[われが]それに耐えうらんことを。われにそのの成就あれ！』と。ここに不明瞭なもの⁹⁾は何も存在しない。

1.1.1.3 次に[祈献を]完遂したとき、[誓戒を]放棄する 『誓戒の主、アグニよ！ [われは]誓戒を実行せり。[われは]それに耐えられり。われはそれを成就せり』(VS.2.28a)と[唱えて]、なぜならば、祈献¹⁰⁾の完遂に至った彼はこれ(=行作の遂行)¹¹⁾に耐えられたから。なぜならば、祈献の完遂に至った彼は成就したから。まさにこの[次第]によって、たいていの人は、現に今¹²⁾、誓戒を遵守する。しかし、以下の[次第]によって[誓戒を]遵守してもよい。

1.1.1.4 実にこの[一切]¹³⁾は2つ一組である。第3のものは存在しない。実在¹⁴⁾と虚妄

²⁾ 当然この主語は、yajñaの主催者である「祈献主」(yājamaṇa-)<「自身のために祈献しつつある者」: yāj-, pres. pt. Middle)を指す。

³⁾ āhavanīya-. この語は、āvhu-「(火の中に)献供する」のGerundive形(直訳は「献供されるべき祭火」)で、Śrauta祭における3祭火の一つを指す。<付録1>を参照。

⁴⁾ gārhapatya-. この語は、grhāpati-「家長」からの派生形(直訳は「家長に属する祭火」)で、Śrauta祭における3祭火の一つを指す。<付録1>を参照。

⁵⁾ “upaspr̥ṣati”「触る」に対するSāyaṇa註を参照:「そして『触ること』とはここでは『口漱ぎ』を意図している」(upaspr̥ṣanam cēhācamaṇam vivakṣitam)。

⁶⁾ an-ṛtá-「虚妄(たわごと)」(<「天則にあらざるもの」)は、satyá-(註14を参照)との対比で用いられることがある。Cf. 辻直四郎、『ヴェーダとウパニシャッド』(特に「第3篇ヴェーダの倫理観」)。

⁷⁾ pavitra-. この語は、K. Mylius, *Wörterbuch des Altindischen Rituals* (sv)によれば、白い羊毛から成るフィルターであるが、J. Gonda, *Vedic Ritual* (p. 114)によれば、一對のkuśa/ darbha草もpavitraとして用いられる。ここでは後者を指す。

⁸⁾ ŚBK.の対応箇所(2.1.1.2)では、「献供火」(āhavanīya-)となっている。Sāyaṇaも同じことを指摘している。

⁹⁾ 原語“tiróhitam”に対するSāyaṇa註「意味不明な語は」(avispaṣṭārtham padam)に従う。

¹⁰⁾ yajñá-. 筆者がこの訳語に2つの意味(「祈りを献げること」、「祈りとともに[供物を]献げること」)を含意させていることに留意されたい。

¹¹⁾ Sāyaṇa註:「“etat”即ち『行作の遂行に』(karma kartum)」という解釈に従う。

¹²⁾ nú. この語に対しては「現に」「現に今」「今は」という訳語を与えた。Cf. M. Mayrhofer, *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*, (sv), PIE. nū, Av. nū, Gr. ný, nýn, Lat. num, Ger.num, Eng. now.

¹³⁾ idam-. この代名詞は、中性名詞として「この世に存在する一切」(idam sarva-)を指すことがある。Cf. J.

のみが存在するのである。神々はまさに実在であり、人々は虚妄である。[ゆえに彼は唱える] 『今や、われは虚妄を出で、実在に入らん』(VS.1.5a)と。ゆえに彼は人々から出て神々に入る。

1.1.1.5 実に彼はまさに実在を語るべきである。さて、実に神々は実在であるこの誓戒をこのように実行する。それゆえ彼らは高名なのである。また、このように知って実在を語るものは高名になる。

1.1.1.6 次に[祈献を]完遂したとき、[誓戒を]放棄する 『今や¹⁵⁾、われはわれなるところのものなり』(VS.2.28b)と[唱えて]誓戒を遵守するとき、このように彼は人にあらざるがごときもの(=神)になる。なぜならば、「今や、われは実在を出で虚妄に入らん」と述べることは適切ではないから。しかしながら¹⁶⁾、事実¹⁷⁾、彼は再び人になる。それゆえ、『今や、われはわれなるところのものなり』と[唱えて]、誓戒を放棄すべきである。

1.1.1.7 さて、これよりまさに食事と断食について。さて、それに関してアーシャーダ・サーヴァヤサ¹⁸⁾は断食こそが誓戒であると考えた。さて、神々は実に人々の思考を知っている。彼ら(神々)は、このように¹⁹⁾誓戒を遵守している者が翌朝に自分らを祈献する者であると知った。[ゆえに]その一切の神々は[祭日の前日に]彼の家に行き、彼の家に泊まる(úpavāsa-)。それがウパヴァサタ(Upavasathá-²⁰⁾)である。

1.1.1.8 食事を取っていない人々(=客人)の間で[家長が]先に食事を取るのには、現に今、不適切である。ましてや、人は食事を取っていない神々の間で先に食事を取るだろうか?それゆえにまた、彼は全く食事を取ってはならない。

1.1.1.9 しかしながら、かつてヤージュニャヴァルキヤは言った 「もし食事を取らなければ、彼は祖霊を神格とする者となる。また、もし食事を取れば、彼は神々に先んじて食事を取ることになる。つまり彼は食べても食べていないとされている物のみを食べるべき

Gonda, "All, Universe and Totality in the Śatapatha-Brāhmaṇa"(SS. VI. pt. 2, pp. 145-161)

¹⁴⁾ satyá- 本邦においては「真実」と訳されることが多いが、中性名詞としては英語の'reality'および'truth'の両意を含意する語であることに注意。Cf. J. Gonda, "The Historical Background of the Name Satya Assigned to the Highest Being"(SS. vol. II, pp. 484-494)。また、形容詞としては:「具体的には《存在し続ける》または《実現する》という含みをもった「真に存在する、実在する」という意味で用いられることが多い」(後藤敏文, 「Śāṅḍilyaの教説再考 BrāhmaṇaとUpaniṣadの間」, p. 4(今西順吉教授還暦記念論集『インド思想と仏教文化』所収))という。

¹⁵⁾ "idám": 「"idam"は動作に対する修飾語であるがゆえに中性なのである」(idam iti kriyāviśeṣaṇatvān napuṃsakam)とŚāyanaも指摘する通り、この"idám"は副詞にとるべきである。

¹⁶⁾ "tád u":

¹⁷⁾ khálu. この語はŚBK. には現れず、対応箇所にはvái/svidが用いられている(ŚBK. intro. p. 78)。Cf. 後藤敏文訳「周知のごとく」(前掲論文, p. 2)。

¹⁸⁾ Macdonell&Keith, *Vedic Index of Names and Subjects*, 1912 によれば、Āṣāḍha-sāvayasa-という名は、「Sāvayasaの子孫であるĀṣāḍha」の意。

¹⁹⁾ "etád": 以下、「etád」の8割以上は副詞に解した。

²⁰⁾ Upavasathá-とは、祭祀の前日に行われる断食や誓戒の遵守等から成る一連の儀礼を指す用語。後に uposatha-, poṣadha-(不薩)という語形で仏教に採り入れられた。意味については、田中純男、「ウパヴァサタ(Upavasatha-)の意義」(『仏教の歴史と思想: 壬生台舜博士頌寿記念』(pp. 277-294 所収), 1985)を参照。

である」と。実に焼供²¹⁾として用いられていない物は食べても食べていない物である。食事を取れば、それによって彼は祖霊を神格としない者となる。しかし、もしも焼供として用いられていない物を食べるならば、それによって神々に先んじて食事を取ることはならない。

1.1.1.10 実に彼は森に生えた物のみを食べるべきである。[すなわち]森に生えた草本か、木の実のみを。さてまた、これに関してバルク・ヴァールシュナも²²⁾よく言っていたものである。「実に焼供として用いられていない豆を私のために調理せよ」と。しかし、これに関して人はそのようになすことはできない。実にこのようにシャミー穀(豆果)²³⁾なるものは米や大麦に類する物²⁴⁾である。ゆえに、彼はまさに米と大麦を、それ(シャミー穀)[を混ぜること]によって増量する。それゆえ、彼は森に生えた物のみを食べるべきである。

1.1.1.11 この夜、彼は、献供火小屋もしくは家長火小屋で²⁵⁾寝るべきである。実に誓戒を遵守する者は誰でも神に近づく。彼が近づく神々のその中央に彼は寝る。彼は下(地面)に寝るべきである²⁶⁾。なぜならば、目上の人に対する敬礼²⁷⁾は下(地面)で[なされる]から。

1.1.1.12 翌朝、実に彼(アドヴァリユ)²⁸⁾は第一の行作として、まさに水に近づく。[そして]水を持ってくる。実に水は祈献である。つまり、彼はこのように第一の行作として、まさに祈献に近づくのである。[そして、水を]持つてくる。このように、彼はまさに祈献を展開する。

²¹⁾ havis-. この語は、語根√hu-「(火の中に)献供する」に接尾辞-isが附加されて形成され、「火の中に献供されるもの」を指す。BŚ. 24. 1 (p. 185. 18)には、「havis-には、草本(auśadha-)、牛乳(payas-)、家畜(paśu-)、ソーマ(soma-)、バター油(ājya-)という5つの形態がある」と述べられているが、KŚ. 1. 9. 1では、「[この書で]havis-という語が用いられた場合は、米か大麦を意味する」(vīrīn yavān vā haviṣi)と規定されている。Cf. J. Gonda, *Haviryajñāḥ Somāḥ*, 1982, pp. 42-44.

²²⁾ āpiの訳語(1.1.3.3も同様)。āpiの本義('by, near, add to this')とその多彩な用法については：Cf. J. Gonda, "The Sanskrit Particle Api"(SS. II. pp. 157-170).

²³⁾ 「シャミー穀」(śamīdhānya-)とは、穀物を5種に分類した中の一種で、しばしば、さやになる豆類(豆果)をさす(Cf. Monier, s. v), śamī-樹は、J. Gonda, *Vedic Ritual* (p. 111)によれば、学名acacia suma.

²⁴⁾ 原語には、3種の語形(B. W. upajā-; G. K. upacā-; ŚBK. upacā- f)が用いられている。筆者は、upajā-をupa√jan-「近くに生える」という語源から解した。3訳のように「付加物・添加物」と解することもできようが、単語自体の用例が少ないためあくまでも推測に過ぎない。

²⁵⁾ この2つの名称は、おそらくIṣṭiの祭場である[祭火]小屋(śālā-)に2つの名称があったことを示すのであって、別々の小屋を指しているのではないと思われる。<付録1>を参照。

²⁶⁾ Sāyaṇa註「他方、寝台等の上にはなく」(na punaḥ kaḍvādy upari).

²⁷⁾ upacārā-. この語は3者の訳では、「下働き/奉仕」と理解されているようであるが、ここでは「敬礼」の意にとった。Cf. Eggeling, "for from below, as it were, one serves one's superior."

²⁸⁾ ここから祭式当日の行作に入る。Adhvayú-は、yajñaにおいて最も活動的な祭官であり、供物の作成と献供、Vediの作成に関わる。Adhvayú-の語源は、ádhvan-「m. (神界に至る)道・旅路」> adhvará-「adj. (神界に至る)道を歩む」,「m. 祭祀」> adhvayú-「(神界に至る)道を歩む者、祭祀に関わる者」。Cf. J. Gonda, "Adhvará- and Adhvayú"(SS. II, pp. 86-100).

1.1.1.13 [ゆえに] 彼は [水を] 持ってくる 『何が汝を結びつけん？彼が汝を結びつけり。彼は汝を何に結びつけん？彼は汝をそれに結びつけり』(VS. 1. 6)というこの説明不能の発言とともに。実にプラジャーパティは説明不能である²⁹⁾。プラジャーパティは祈献である。ここで、彼はこのようにまさにプラジャーパティと祈献を結びつける。

1.1.1.14 彼が水(áp-)を持ってくるのは、この一切 [世界] が水によって浸透(√āp-)されているからである。ここで、彼はこのようにまさに第一の行作によって一切 [世界] を獲得する(√āp-)。

1.1.1.15 これ(行作)に関して、ホートリか、アドヴァリユか、ブラフマン祭官³⁰⁾か、アーグニードラか、あるいは祈献主自身が [すべてを] 成し遂げることがないのは、彼がこれ(行作)の一切をこの [第一の行作] によって、獲得するからである³¹⁾。

1.1.1.16 さて、彼が水を持ってくる時、実に祈献によって祈献しつつあるその神々を修羅と羅刹が妨害した 「祈献することなかれ！」と [言って] 彼らは妨害(√rakṣ-)したので、羅刹(rákṣas-) [と称するのである]

1.1.1.17 その後、神々は水なるものはこの雷であると気づいた。実に雷は水である。なぜならば、水は雷であるから。それゆえ、それらが赴くところにくぼみを作り、それらが到達するところを焼き尽くす。その後、彼ら [神々] は、この雷を取り上げつつ、それ(雷)による恐怖なく魔物のいない安全地において祈献を展開した。また、そのようにして彼はこの雷を取り上げる。そして、それ(雷)による恐怖なく、魔物のいない安全地において祈献を展開する。それゆえ、彼は水を持ってくる。

1.1.1.18 彼はそれ(水)を [容器に] 注ぎ、家長火の北側に置く。実に水は女であり、火は丈夫³²⁾である。実に家長火は家である。ゆえに、このように家の中でのみ、子をつくる性交が行われる。実に水を持ってくる彼は雷を取り上げる。実に安立しないうちに雷を取り上げようとしても、これを取り上げることはできない。もしそうするならば、それが彼を打ち砕く [から]

1.1.1.19 彼が家長火のもとに [水の入った容器を] 置くのは [以下の理由による] 実に家長火は家である。実に基盤は家である。ゆえに [容器は] 基盤(pratiṣṭhā)³³⁾である家に

²⁹⁾ Cf. J. Gonda, "Some Notes on Prajāpatir Aniruktaḥ"(SS. VI. pt. 2, pp. 382–398).

³⁰⁾ brahmāṇ- (m). この語はVeda文献において「祭官(一般)」「ブラフマン祭官」という2つの意味を表す。Cf. H. W. Bodewitz, "The Fourth Priest (the Brahman) in Vedic Ritual" (*Selected Studies on Ritual in the Indian Religions, Essays to D. J. Hoens*, pp. 33-68).

³¹⁾ Eggeling, "And whatever here in this (sacrifice), the Hotṛ or the Adhvaryu, or the Brahman, or the Āgnīdhra, or the sacrificer himself, does not succeed in accomplishing, all that is thereby obtained (or made good)"およびDelbrück (Ai. Syntax, p. 475)のようにyad ~ tad ~をsarvamにかかる関係代名詞とはせず、「yad以下はtad以下のゆえなり」という構文に解した。いずれにせよ、意味は不明確。

³²⁾ vṛṣan-. この語は「adj. 精力のある、猛々しい; n(精力旺盛な)丈夫; 種牛」を意味する。Cf. B. Oguibénine, "Bull, Cow and Woman in Vedic and Indo-European, and Vedic Stylistic Features"(*Three Studies in Vedic and Indo-European Religion and Linguistics*, Poona, 1990, pp. 35–44).

³³⁾ Cf. J. Gonda, "Pratiṣṭhā"(SS. II, pp. 338–374).

このように安立する(pratitiṣṭhati)。そしてまた、そうすればこの雷が彼を傷つけることはない。それゆえ、彼は家長火のもとに置く。

1.1.1.20 彼はそれを献供火の北側(úttara-)に持ってくる。実に水は女であり、火は丈夫^{ますらお}である。このように子をつくる性交が行われる。なぜならば、このようにしてこそ完全な性交であるから。なぜならば、女は男の左側(úttara-)に寝るから³⁴⁾。

1.1.1.21 それ(水)[と火]の間を通過すべきではない。「行われつつある性交の間を通過すべきではない」と[世間に言われるから]それ(水)を[火の北側を]越えて運ぶことなしに、置くべきである。しかし、[火の北側に]到達することなく置いてはならない。彼が[火の北側を]越えて運んで置くとき、実に火と水との[間に]対抗心のごときものが存在する。彼が[火の北側を]越えて運んで置くとき、ちょうど彼(火)の水に彼ら(祈献主・祭官)が触れたときに火の[対抗心]が生じるがごとくに、火の中の対抗者³⁵⁾を繁栄させるであろう。また、もし[火の北側に]到達することなく置かならば、その願望のために[水を]持ってきたところの願望を実現させることはないであろう。それゆえ、彼は[水を]献供火のまさにちょうど北側に持っていく。

1.1.1.22 次に、[火を]草によって取り囲む。彼は、箕とアグニホートラ用柄杓、木剣と素焼きの皿³⁶⁾(数枚)、シャミヤー³⁷⁾と黒羚羊の皮、搗鉢・搗粉木、下碾き石・上碾き石というように、用具を2つずつ³⁸⁾準備する。このように10[種]ある。実にヴィラージュ[という韻律]は10音節である。実に祈献はヴィラージュである。ここで、彼はこのように祈献をまさにヴィラージュに対して等しいものにする。さて[彼が]2つずつ[用具を準備するのは]、実に勇力³⁹⁾は2つ一組だからである。実に2つ一組のものが合体するとき、それは勇力となる。実に2つ一組のものは子をつくる性交である⁴⁰⁾。実にこのように子をつくる性交は行われる。

1.1.2.1 次に、箕とアグニホートラ用柄杓をとる 『行作のために汝ら兩人を、任務のた

³⁴⁾ Cf. J. Gonda, "The Significance of the Right Hand and the Right Side in Vedic Ritual", (SS. VI. pt. 1, pp. 41-63).

³⁵⁾ 「対抗者」(bhrātr̥vya-)とは「対抗心」(vibhrātr̥vya-)を人格化した表現か(?)。bhrātr̥vya-に関しては、風間喜代三、『印欧語の親族名称の研究』、pp. 209-257, 1984を参照。yajña-と戦争との対比に関しては、松濤誠達、「祭祀と戦争」(『大正大学研究論叢』、創刊号、1992, pp. 203-225)を参照。

³⁶⁾ kapāla-. 永ノ尾信悟氏の訳を採用した(「古代インド祭式文献に記述された穀物料理」、国立民族博物館研究報告、9巻3号所収、1984、特にp. 526)。その他の祭式用具についてはYajñāyudhāni (An Album of Sacrificial Utensils with Descriptive Notes), (ed. by T. N. Dharmadhikari, Pune, 1989)を参照。

³⁷⁾ śamyā-とは、khadira/Vārana樹製の杖の形をした棒で、祭場の測量に用いられる。本来は、くびきの両端に刺された「木くぎ」を指す用語(＜付録2＞を参照)。

³⁸⁾ "dvamdvaṃ". この用法は、Pāṇiniが規定している:Pāṇ. 8. 1. 15「dvamdvaṃという語は、『秘密』(rahasya-)、『限界の表示』(maryādā-vacanā-)、『分離』(vyutkrāmaṇa-)、『祈献用具の使用』(yajña-pātra-prayogā-)、『顕示』(abhivyākti-)を表す際に用いられる」。

³⁹⁾ vīryā-. Cf. J. Gonda, "Gods" and "Powers" in the Veda, 1957, p. 60.

⁴⁰⁾ 2つ一組(一対)のものが勇力であり、子をつくる性交であるという発言は、ヴェーダにおいて散見される。Cf. J. Gonda, Viṣṇuism and Śivaism. A Comparison, 1970, p. 56, note 304.

めに汝ら兩人を』(VS.1.6b)と[唱えて]、実に行作は祈献である。なぜならば、祈献のために[行作は存在するから]、それゆえ彼は唱える『行作のために汝ら兩人を』と、[また]『任務のために汝ら兩人を』と。なぜならば、彼は祈献に仕えるがごとくであるから。

1.1.2.2 次に、音声を抑制する。実に[抑制された]音声は乱されていない祈献である。次に『われは祈献を展開せん!』と[低唱して、一對の用具を]熱する。あるいは『羅刹は焦げり。アラータ⁴¹⁾らは焦げり。羅刹は燃え尽けり。アラータ⁴¹⁾らは燃え尽けり』(VS.17ab)と[低唱して]

1.1.2.3 さて実に神々が祈献を展開しつつあるとき、彼らは阿修羅・羅刹らによる襲撃を恐れた。ゆえに、このように彼は魔物らや羅刹らをこの祈献の冒頭から撃退する。

1.1.2.4 次に、[荷車⁴²⁾まで]前進する『われは広大な空界の中を進まん』と[唱えて]、基礎をもたず[天地]両方に対して断絶している、実に[その]空界の中を羅刹は歩く。ちょうどこの男(アドヴァリユ)が、基礎をもたず[天地]両方に対して断絶している空界の中を歩くように。ここで、彼はまさにブラフマン⁴³⁾によって、このように空界を恐怖なく魔物なきところとする。

1.1.2.5 実に彼はまさに荷車から[米を]とるべきである。さて実に最初は荷車が[米びつとして]存在するが、後には実に[祭火]小屋全体⁴⁴⁾が[米びつ]のごとくである。「最初に[米びつとして]存在するものをういよう!」と彼は[願う]、それゆえ、彼はまさに荷車から[米を]とるべきである。

1.1.2.6 実に荷車は大量である。なぜならば、荷車は実に大量であるから。それゆえ、たくさんの物があるとき、人々は「荷車で運ばれるべき物がある」と言うのである。ゆえに彼はこのようにまさに大量であるものに近づく。それゆえ、彼は荷車からこそ[米を]とるのである。

1.1.2.7 実に荷車は祈献である。なぜならば、実に祈献は荷車であるから。それゆえ、まさに荷車に対して祈献文^{ヤジユス}は存在する。倉庫に対してや、壺のためにではない。さて、聖仙たちはいつも革袋から[米を]とっていたものである。ゆえにまた、聖仙にとって、祈献文^{ヤジユス}は革袋に相当するものであった。今では、それらは自然なことである。「われは祈献から祈献を創り出そう!」と[彼は願う]、それゆえ、まさに荷車から彼は[米を]とるべきである。

1.1.2.8 しかし、彼らは木皿⁴⁵⁾からも[米を]とる。また、彼はその直後に祈献文^{ヤジユス}を低唱

⁴¹⁾ arāti-は「容赦なきもの、寛大ならざるもの」という意味の悪魔の一種。

⁴²⁾ 荷車の構造については<付録2>を参照。

⁴³⁾ brāhman-. Cf. J. Gonda, *Notes on Brahman*, 1950; P. Thieme, "Brāhman"(KS. pp. 100-138).

⁴⁴⁾ Sāyaṇa註が“śālam”という語形を「śālā-という語の後ろに、chandasに属することによって、cha (īya-)と任意に交替するするのでan (a-)が用いられている」と説明している(すなわち, śālā+īya śālya- śāla-)ことに従って訳した。ŚBKの対応箇所(2. 1. 2. 7)ではśālā-という普通の語形が用いられている。

⁴⁵⁾ pātrī-/pātrī-. この語は、idā-pātrī-, puoḍāśa-pātrī-, piṣṭa-pātrī-等の総称で、ヒョウタン形や長方形の容器に取っ手がついたものを指す。

すべきである。またそのとき、彼は木剣を〔木皿の〕下に⁴⁶⁾刺して〔米を〕とるべきである。「われらが結びつけようとする場所に、われらは放とう」と〔願って〕なぜならば、彼らは結びつける場所に放つから。

1.1.2.9 実にこの荷車のくび当てはそれの祭火にほかならない。なぜならば、火は実にくび当てであるから。〔その証拠に〕これ（荷車）を牽くとき、かれら（牛）たちの肩は火で燃やされたごとくになる。そのとき、支え木の後方のプラウガ⁴⁷⁾はそれのヴェーディにほかならず、^{ハヴィルターナー}焼供の容器⁴⁸⁾は荷台にほかならない。

1.1.2.10 〔ゆえに〕くび当てに触る『汝はくび当てなり。傷つけつつある者を傷つけよ！われらを傷つける者を傷つけよ！われらが傷つけようとする者を傷つけよ！』⁴⁹⁾(VS.1.8a)と〔唱えて〕実にこのくび当てに存在するものは火である。彼が焼供をとろうとするとき、このようにそれを通過するものとなる。まさにそれ（火）に対し、彼はこれらを謝罪する⁵⁰⁾。またそうすれば、これ（火）を通過しようとする彼を、くび当てに存在する火が傷つけることはない。

1.1.2.11 さて、これに関してアールニ〔仙〕はよくこのように言っていたものである。「実に半月毎に（＝新月満月時に）私は敵どもを傷つける」と。そして、このように彼はよくそのことを述べていたものである。

1.1.2.12 次に、支え木の後方のながえに触って低唱する『汝は神々の中で最上の牽引者にして、最上の調達者にして、最上の知足者にして、最上の受愛者にして、最上の神勸請者なり。汝は最上の不曲者にして、^{ハヴィルターナー}焼供の容器なり。強固たれ！折れることなかれ！』（VS.11.8-9a）と。彼はまさに荷車に対してこのように〔讃歌で〕祝福する『祝福され、満足した〔荷車〕より、われは焼供をとらん！』と〔唱えて〕『汝の祈献の主は折れることなかれ！』（VS.1.9a）と〔彼は唱える〕実に祈献の主（yajñapati-）は祈献主（yājamāna-）である。ゆえに、彼はまさに祈献主のために折れないことをこのように請い求める。

1.1.2.13 次に、〔荷車に〕近づく『ヴィシュヌ（Viṣṇu-）は汝に近づく（√kram-）べし！』

⁴⁶⁾ B. G. K. adhástāt, W. avástātと2つの語形が用いられている。Petersburg Wörterbuch(s. v)では、avástātという（訂正した？）語形で収録されている。

⁴⁷⁾ prá-üga- (< pra-yuga-) . Śulbasūtraにおいては二等辺三角形を指す用語。ここでは荷車における荷台に隣接する三角形の部分の部分を指しているのか。Cf. S. S. P. Sarasvati, *The Critical and Cultural Study of the Śatapatha-Brahmana*, Delhi, 1988, p. 522.

⁴⁸⁾ havirdhāna- . havirdhāna[maṇḍapa]-という語は、ソーマ祭において祭場の中央で用いられるテント（の場所）を指す用語であるが、そこで用いられる荷車を指すこともある。

⁴⁹⁾ “dhūr asi. dhūrva dhūrvantam. dhūrva tám yò 'smān dhūrvati. tám dhūrva yām vayām dhūrvāma.” dhūr/dhūrva という語ろ合わせから作られたMantra . Cf. 永ノ尾信悟, 「古代インド祭式文献における語ろ合わせの意味」『民博通信』, No. 30, 1985/10, pp. 70-84.

⁵⁰⁾ ni/vhnu- . Cf. “sich entschuldigen”(B. Delbück, *Ai Syntax*, p. 142) ; nihnava[na]- ‘rite of atonement’ (J. Gonda, *The Ritual Functions and Significance of Grasses in the Religion of the Veda*, p. 213) ; J. Broughの見解が正鵠を射ているかは疑問 : Cf. “...original meaning of the verb seems to have been “to conceal one’s actions from a person, so as to avoid rousing his anger” ... even in its later developments the word never came to be quite equivalent “to propitiate”...” (J. Brough, “The meaning of ni/vhnu in the Brāhmanas”, pp. 126-130, 1950) ; また , Sāyaṇa註“apanayati”も不適切。

と[唱えて]、実にヴィシュヌは祈献である⁵¹⁾。彼は神々からこの踏破力(vi krānti-) ⁵²⁾を勝ち取った(vi√kram-), [かつては]彼ら(神々)のものであったこの踏破力を。彼は最初の歩みによってこの[地界すべて]を獲得した。次に, 第二の[歩み]によって空界を, 最後の[歩み]によって天界を[獲得した]。この祈献であるヴィシュヌはまさにこの踏破力を彼(祈献主)のために勝ち取るのである。

1.1.2.14 次に,[米を]見つめる 『風のために広大[たれ]!』(VS.1.9d)と[唱えて]、実に風は氣息である。ここで彼は, このようにまさにブラフマンによって, 氣息である風のために広大な空間を造るのである。

1.1.2.15 次に,[米を]放り投げる もしもこの場所に何か降ってくるものがあれば 『羅刹は撃退されり』(VS.1.9e)と[唱えて]、しかし, もしも何も[降ってくるものが]なければ, ただ[米に]触るべきである。ゆえに, このように彼は魔物にほかならない羅刹たちをこの場所から撃退する。

1.1.2.16 次に,[米の上に]手を置く 『5粒握れ!』(ibid.)と[唱えて]、実にこの指は5本である。実に祈献は5つ一組である。ここで彼は, まさに祈献こそ, このようにここに置く。

1.1.2.17 次に,[米を]つかむ 『サヴィトリの激励(ノ刺激)において, アシュヴィン双神の両腕によりて, [あるいは]プーシャンの両手によりて, われはアグニのために好ましい汝をつかまん』(VS.1.10ab)と[唱えて]、実に神々を激励するものはサヴィトリである。ここで, 彼はまさにサヴィトリによって激励されたものとして, このように[米を]つかむ。『アシュヴィン双神の両腕によりて』と[彼が唱えるのは], アシュヴィン双神は2人のアドヴァリユである[から], 『プーシャンの両手によりて』と[彼が唱えるのは], プーシャンは両手によって食物を[神々の]近くに置く分配者である[から]、神々は^{まこと}実在であり, 人々は^{たわごと}虚妄である。このように[米を]つかむための[用具]はそれ(神々)である。

1.1.2.18 次に, 神格に[供物の到来を]報告する。そして, 実にすべての神格は, 今まさに焼供をつかもう(√grah-)としているアドヴァリユに近づく 「わが名を彼は述べる(√grah-)であろう。わが名を彼は述べるであろう」と[考えて]、このように彼はまさにそれらの善良なるもの(神格)たちとの友好関係を作る。

1.1.2.19 また, 彼が神格に[供物の到来を]報告するのは, [以下の理由による]。さて実にはいかなる神格たちにより焼供が受け取られようと, それらは彼によって実にまさに債務として考えられる, 彼に対しその願望を実現するであろうものとして, [あるいは]願望によって彼がとるところのものとして。それゆえ, 実に彼は神格に[供物の到来を]報告する。まさにこのように, 以前と同様に, 焼供をとってから, (後続)

⁵¹⁾ Cf. J. Gonda, "Vedic Gods and the Sacrifice"(SS. VI. pt. 2, pp. 185-218, esp. p. 206).

⁵²⁾ Eggeling 訳'all-pervading power'. 「Viṣṇuの3歩」については: Cf. J. Gonda, *Aspects of Early Vismuism*, 1954, p. 55ff; F. B. J. Kuiper, "The Three Strides of Viṣṇu" (*Ancient Indian Cosmogony*, pp. 41-55), 1962.

1.1.2.20 次に、[残りの米に]触る 『豊穰(ノ生産)のために⁵³⁾汝を[残す]、物惜しみのために[残すに]あらず』(VS.1.1.1a)と[唱えて] ゆえに、彼はまさにそこから[米を]とるところのもの(荷車)を、このように再び一杯にする。

1.1.2.21 次に、東方を向いて見つめる 『[われは]光輝を見ん!』(VS.1.1.1b)と[唱えて] 実に荷車はこのように[米によって]覆われたごとくとなる。ゆえに彼の眼はこのように罪惡に捕らえられたごとくとなる。実に、光輝は祈献であり、火であり、神々であり、太陽である。ここで彼は、光輝をこのようにこの場所で見ると。

1.1.2.22 次に、[荷車から]降りる 『扉を備えたものは大地に安立せよ!』(VS.1.1.1c)と[唱えて] 実に扉を備えたものは家である。さてこのアドヴァリユが祈献と共に徘徊したとき、祈献主のその家は前進しつつある彼を追ってこの場所で倒れ、彼(祈献主)の家族を狼狽させかねない。彼はこのようにまさにその[家]こそ、この大地に安定させる、そのように[彼の]後を追って倒れ、[家族を]狼狽させることのないように。それゆえ、彼は言う 『扉を備えたものは大地において安立せよ!』と。次に彼は[家長火の北側まで]前進する 『[われは]広大な空界の中を進まん』(VS.1.1.1d)と[唱えて] [ゆえに]まさにそれが趣旨⁵⁴⁾である。

1.1.2.23 彼ら(祭官)が彼(祈献主)の家長火で焼供を焼くとき、彼の容器を彼らは家長火のもとに設置する。そのとき彼(アドヴァリユ)は家長火の後方に置くべきである。献供火で焼供を焼く場合、彼の容器を彼ら(祭官)は献供火のもとに設置する。そのとき彼は献供火の後方に置くべきである 『大地のへそに汝を置く』(VS.1.1.1e)と[唱えて] 実にへそは中央であり、中央は恐怖なきところである。それゆえ、彼は唱える 『大地のへそに汝を置く』と。[さらに] 『アディティの膝の上に[汝を置く]』と[彼は言う] よく保護されたものを保護するとき、人々は実に「彼らはそれを膝の上で抱いている」と言うからである。それゆえ、彼は唱える 『アディティの膝の上で』と。[さらに] 『アグニよ! 供物を保護せよ!』と[彼は唱える] ゆえにアグニにこそ、またこの大地にこそ、保護を理由として彼はこのように焼供を与えるのである。それゆえ、彼は唱える 『アグニよ! 供物を保護せよ!』と。

1.1.3.1 彼は2つの濾過具を作る 『汝らは2つの濾過具にして、ヴィシュヌに属するものなり』(VS.1.1.2a)と[唱えて] 実にヴィシュヌは祈献である。『汝らは祈献に属するものなり』と、このように彼は唱える。

⁵³⁾ “bhūtāya”. 意味にやや問題あり。Cf. Uvaṣa ad VS. 「蒔かれ、植えられた米等の良質の[焼供が]再び豊かに実ることを[願って、米を]残すのであって、いやしいがために[残しているのでは]ない。(uptam ropitaṃ sat vrīhyādi punar eva bahu bhaviṣyatīti pariśeṣayāmi na kṛpaṇatāyai). Mahīdhara ad VS. 「『bhūtāya 即ち別の祭祀に際して[焼供が]存在するために、プラーフマナの食事の再度の接待のために、tvā即ち汝を残す』と補って解釈すべきである」(bhūtāya bhavanāya yāgāntarāṇām brāhmaṇa- bhojanasya ca punar api sadbhāvāya tvā tvām sampariśeṣayāmīti śeṣaḥ); Cf. J. Gonda, *Mantra Interpretation in the Śatapatha-Brāhmaṇa*, 1988, pp. 124–125.

⁵⁴⁾ bāndhu-. 原義は「関連、親類」であり、Br.においては「(祭式における行作と霊界/神界との)関連」「祭式の趣旨」等の意味で用いられる: Cf. J. Gonda, “Bandhu in the Brāhmaṇa-s”(SS. II, pp. 400-428).

1.1.3.2 実にそれらは2つである。実にこれ(風)が[自ら]濾過されるというものが濾過具である。実に[自ら]濾過されるものはこれ(風)唯一である。これ(風)は人に入り込んで、前を向くものと後ろを向くものになる。これら2つはプラーナとウダーナである。ここでは、まさにこれ(氣息)の合計に従うので、[濾過具は]2つなのである。

1.1.3.3 さて、また[濾過具は]3つかもしれない。なぜならば、ヴィヤーナという第3の[氣息が存在する]から。今は、まさに2つ[の濾過具]が存在する。それら2つ[の濾過具]によって、この散布水を浄化して、それらを撒くのである。これら2つ[の濾過具]によって[水を]浄化するのはそういう理由である。

1.1.3.4 さて実に、ヴリトラは天と地の間に[広がる]この一切[世界]を覆って横たわっていた。それはこの一切[世界]を覆って(vṛtvā)横たわっていたので、ヴリトラ(Vṛtrá-)と称するのである。

1.1.3.5 インドラは彼を殺した。殺された彼は悪臭を放つ水をありとあらゆる方向に向かって流した⁵⁵⁾。なぜならば、この海はあらゆる方向に[広がっている]がごとくだから。さてまた、それゆえにある水は吐き気を催した。それは、次から次へとあふれ出した。それゆえに、これらのダルバ草が[用いられる]。さて、これらは腐っていない水である。悪臭を放つヴリトラがかの[不浄な水]を流したとき、もう一方の[不浄な水の]中に実に混ざり合ったごとくになる。まさにそれゆえに、彼はそれら[の不浄な水]をこれら2つの濾過具によって撃退する。次に、彼は祭式に適した水を撒く。それゆえ、実に彼はこれら2つ[の濾過具]によって浄化する。

1.1.3.6 [ゆえに]彼は[水を]浄化する 『サヴィトリの激励において、汝らを浄化せん、傷穴のない濾過具によりて、太陽の光線によりて』(VS.1.12b)と[唱えて]。実に神々を激励するものはサヴィトリである。ゆえに、彼はサヴィトリによってまさに激励されたものとして[水を]浄化する。『傷穴のない濾過具によりて』と[彼が言うのは]、実に傷穴のない濾過具は[水を]浄化するからである。これにより、彼はこのように言うのである 『太陽の光線によりて』と。太陽の光線らは、実にこれらを浄化するものである。それゆえ、彼は唱える 『太陽の光線によりて』と。

1.1.3.7 彼は[柄杓に入った]それ(水)を左手に持って、右手によって揺らし、[讃歌で]祝福する。このように彼はそれ(水)をまさに誉め称える⁵⁶⁾ 『神聖なる水は先頭を進む者にして、最初に飲む者なり』(VS.1.12c)と[唱えて]。なぜならば、水は神聖であるから。それゆえ、彼は唱える 『神聖なる水は』と。『先頭を進む者なり』と[彼が唱えるのは]、それは海に向かって[先頭を]進むから、先頭を進む者なのである。『最初に飲む者なり』と[彼が唱えるのは]、[植物の]王であるソーマを最初に飲むから、最初に飲

⁵⁵⁾ Vṛtrá- は、山を巻き込んで河川を閉じ込めている、蛇の形をした魔物。Cf. 辻直四郎、『リグ・ヴェーダ讃歌』, pp. 149-152; 後藤敏文,(上村勝彦, 宮元啓一編『インドの夢, インドの愛』), pp. 9-14.

⁵⁶⁾ √mah-の意味については: Cf. J. Gonda, "The Meaning of Skt Mahas and its Relatives" (SS. II, pp. 448-483).

む者なのである⁵⁷⁾。『今や、この祈献を先頭に導け！先頭にいる裕福な祈献の主まで、神々に従順な祈献の主まで』と〔彼は唱える〕〔さらに〕『祈献をよく〔導け〕！祈献主をよく〔導け〕！』と、このように彼は唱える。

1.1.3.8 〔次に彼は唱える〕 『インドラはヴリトラ退治において汝らを選べり！』(VS.1.13a)と。なぜならば、インドラはヴリトラと敵対している時に彼ら(水)を選び、彼らと共に彼を殺したから。それゆえ、彼は唱える 『インドラはヴリトラ退治において汝らを選べり！』と。

1.1.3.9 〔次に彼は唱える〕 『汝らはヴリトラ退治においてインドラを選ぶべし！』と。なぜならば、彼らはヴリトラと敵対しているインドラを選び、彼らと共に彼を殺したから。それゆえ、彼は唱える 『汝らはヴリトラ退治においてインドラを選ぶべし！』と。

1.1.3.10 〔次に彼は唱える〕 『汝らは散水されり』と。ここで彼は、これら〔の散布水〕に対し謝罪する。次に彼は焼供に散水する。実に散水の趣旨は一つである。彼はこれ(焼供)をまさに祭礼に適したものとするのである。

1.1.3.11 〔ゆえに〕彼は散水する 『好ましい汝をわれはアグニのために撒かん！』(VS.1.13e)と〔唱えて〕このように焼供がどの神格に〔捧げられようとも〕その神格のために彼は〔焼供を〕祭礼に適したものとす。まさにこのように、以前と同様に、焼供に散水してから、(後続)

1.1.3.12 次に、〔木製の〕祈献用容器に散水する 『汝らは清めよ！神聖な行作のために、神々への崇拜のために』(VS.1.13g)と〔唱えて〕なぜならば、彼は神聖な行作のために、神々の崇拜のために清めるから。『不浄なるものによりて打ち倒されしものを〔われは〕汝らのために清めん！』と〔彼は唱える〕ゆえに、この場合に祭礼に不適な人〔すなわち〕木こりかあるいは他の誰か祭礼に不適な人が打ち倒したもの(木)より作られたものを、このように彼は水によって祭礼に適したものとす。それゆえ、彼は唱える 『不浄なるものによりて打ち倒されしものを〔われは〕汝らのために清めん！』と。

1.1.4.1 次に、黒^{カモンカ}羚羊の皮を手にとる、まさに祈献の完全性⁵⁸⁾のために。かつて祈献は神々から逃げ出した。彼は黒羚羊になって歩き回った。神々は彼の皮を見つけ、〔それを〕剥いで、持ち去った。

1.1.4.2 彼(祈献)の白い毛と黒い毛は讚歌^{リチュ}と歌詠^{サマン}の姿である。白いものは歌詠の姿であり、黒いものは讚歌の〔姿〕である。あるいはもしも逆ならば、黒いものこそ歌詠の姿であり、白いものは讚歌の〔姿〕である。茶色がかった黄色いもの⁵⁹⁾こそ祈献文^{ヤジュス}の姿である。

1.1.4.3 この3つ一組の明智^{ヴィディヤ}⁶⁰⁾は祈献である。その〔明智〕の外観はこの色である。そ

⁵⁷⁾ Cf. Sāyana註:「水は、じじつ、搾出のために〔ソーマによって〕浸されているので、祀られるべき神格の中で最初にソーマの味を享受するのである」(āpaḥ khalv abhiṣavārtham āsicyamānā yaṣṭavya-devatābhyah pūrvam somarasam āsvādayanti).

⁵⁸⁾ sarvatvá-. Cf. J. Gonda, “Reflections on Sarva- in Vedic Texts” (SS. II, pp. 495–513).

⁵⁹⁾ “babhrúnīva hárīṇi”. Cf. ŚBK. 2. 1. 3. 8 “babhrūni vā hárīṇi vā” 「茶色もしくは黄色いもの」.

⁶⁰⁾ trayī vidyā. R̥c- 「讚歌」、Yajus- 「祈献文」、Sāman- 「歌詠」を指す用語。J. Gondaはvidyā-を“ritually or

れ(祈献)が黒羚羊の皮となるのは以上の理由による。まさに祈献の完全性のために[彼は皮を手にとる]、それゆえ、まさに祈献の完全性のために,[祈献主は]黒羚羊の皮の上で潔斎⁶¹⁾するのである。それゆえ,[皮は]脱穀用・製粉用として用いられる。「焼供がこぼれ出ることのないように」と[彼は願う]、ここで「穀粒か穀粉がこの上に撒かれることによって、祈献の上で祈献は安定するであろう」と[彼は考える]ので,[皮は]脱穀用・製粉用として用いられる。

1.1.4.4 次に、黒羚羊の皮を手にとる 『汝は抛り所(śárman-)なり』(VS.1.14a)と[唱えて]、実に、黒羚羊に属するものは「皮」(cárman-)であるというのは人間に属する[事実であり]、神々の間では[それは]「抛り所」[と呼ばれる]、それゆえ、彼は唱える 『汝は抛り所なり』と。彼はそれを振る 『羅刹は振り落とされり。アラーティらは振り落とされり』(b)と[唱えて]、ここで彼は、このようにまさに魔物であるこの羅刹らをここから撃退する。彼は容器を離すように置いて,[皮を]振る。なぜならば、これに不浄なものがあつたならば、このように彼はそれを振り落とすから。

1.1.4.5 彼は[黒羚羊を]首を西に向けて広げる 『汝はアディティの皮なり。アディティは汝に気づくべし!』(VS.1.14c)と[唱えて]、実にアディティはこの大地である。それの上にあるものはなんであろうとその皮である。それゆえ彼は唱える 『汝はアディティの皮なり』と。『アディティは汝に気づくべし!』と[彼が言うのは]、なぜならば、自己に属するものは[自己と]協調するからである。ゆえに、彼は黒羚羊の皮に対してこのように協調を説く 「互いに傷つけ合うことのないように」と[願って]、左手によって[大地に]置かれるのは[以上の理由による]

1.1.4.6 次に、右手によって擗鉢をとる 「魔物である羅刹らが決して入ってくることのないように」と[願って]、なぜならば、ブラーフマナは羅刹らの撃退者であるから。それゆえ、左手によって[大地に]置かれる。

1.1.4.7 次に、擗鉢を置く 『汝は木製のアドリ(ソーマ搾出石の一種)なり』(VS.1.14d),あるいは『汝は広い底をもつグラ－ヴァン(ソーマ搾出石の一種)なり』(e)と[唱えて]、ゆえに彼らが地面において王であるソーマをグラ－ヴァンによって搾出するのと同じように、彼はこのように焼供による祈献を擗鉢・擗粉木と下碾き石・上碾き石とによって搾出するのである。実に「アドリ」とはそれらの一つの名前である。それゆえ彼は唱える 『汝はアドリなり』と。『木製の』と[唱えるの]は、それは木製だからである。『汝は広い底をもつグラ－ヴァンなり』と[唱えるの]は、それはグラ－ヴァンであり、かつ広い底をもつからである。『アディティの皮は汝に気づくべし!』と[彼は唱える]、ここで、彼は黒羚羊の皮に対してこのように協調を説く 「互いに傷つけ合うことのないように」と[願って]

1.1.4.8 次に,[擗鉢に]焼供を注ぎ入れる 『汝はアグニの身体にして、音声(vác-)の

magically potent or effective wisdom or knowledge”と説明している(“Pratiṣṭhā” (SS. II, pp. 338–374), p. 343).

⁶¹⁾ √dīkṣ-. Cf. J. Gonda, “Dīkṣā” (*Change and Continuity in Indian Religion*, pp. 315–462).

放出者なり』(VS.1.15a)と[唱えて]なぜならば、祈献はそれによってアグニの身体となるから。『音声の放出者なり』と[唱えるの]は、実に今まさにかの焼供をつかもうとするとときに押さえた音声を、実にこの場所で放つからである。彼がこの音声をこの場所で放ったのは、この祈献は播鉢に安立するからであり、この[祈献]は流れ広がる(=展開される)からである。それゆえ彼は唱える『音声の放出者なり』と。

1.1.4.9 これ以前に彼が人間の音声を発するのならば、そのとき彼はヴィシュヌに対する讃歌か祈献文を低唱すべきである。実にヴィシュヌは祈献である。ゆえに彼は再び祈献にとりかかる。そしてまた、この贖罪法が彼によって[執行される]『われは神々への御馳走のために(devāvīṭaye)汝をつかまん』(ibid.)と[彼は唱える]なぜならば、神々を喜ばせる(devān avat)ものとして焼供は用いられるから。

1.1.4.10 次に、播粉木をつかむ『汝は大きな木製のグラブアンなり』(VS.1.15b)と[唱えて]なぜならば、これは大きなグラブアンにして、かつ木製だから。彼はそれを押しつける『汝は神々のためにこの焼供を調理せよ！入念に調理せよ！』(c)と[唱えて]『汝は神々のためにこの焼供を上手に仕上げよ！仕上げたものをさらに仕上げよ！』(c)と、このように彼は唱える。

1.1.4.11 次に、焼供調理人と呼ぶ『焼供調理人よ、来たれ！焼供調理人よ、来たれ！』(VS.1.15d)と。実に焼供調理人は音声である。このように彼は音声を放つ。また、実に祈献は音声である。ここで彼は、このように祈献を再び呼び出す。

1.1.4.12 実に、それはこの4つの音声[即ち]ブラーフマナに対する「来たれ！」と、ヴァイシヤと王侯階級の者に対する「やって来い！」・「急いで来い！」と、シュードラに対する「走って来い！」とである。彼はブラーフマナに対する音声を述べるのである。なぜならば、「来たれ！」と[唱えること]は最も祈献にふさわしく、そしてまた、実に「来たれ！」と[唱えること]は音声に対して最も丁寧であるから。それゆえ、彼は「来たれ！」と唱えるべきである。

1.1.4.13 さてこれに関して、かつてはこのようにほかならぬ妻がこの焼供調理人としてかけつけていたものである。ゆえに今でも、このように誰か(妻もしくは祭官)が立ち上がる。そのとき彼は、下碾き石・上碾き石を打ち合わせる焼供調理人と呼ぶ。そのとき、彼はこの場所でこの音声を響きわたらせる。

1.1.4.14 実に、かつて牡牛はマヌのものであった。彼の中に、阿修羅殺し・敵殺しの音声が入り込んだ。そして彼の吐息と咆吼により、阿修羅・羅刹らはずっと押しつぶされつづけていたものである。さて、その阿修羅らは互いに述べ合った「おお！この牡牛はわれらに害悪をもたらす。いかにしてわれらは、現に今、彼を殺すことができるのか」と。さて[そのとき]、キラータとアークリという名の阿修羅らの祭官⁶²⁾がいた。

1.1.4.15 さて、両人は言った「実にマヌは信仰を神とする⁶³⁾。現に今、われら両人は

⁶²⁾ brahmāṇ-. 註 30)を参照.

⁶³⁾ śraddhā-deva-. このCp. は、前分にアクセントを有するので「AをBとしてもつ」という意味のBahuvrīhi

[そのことを]確かめよう！」と。そして兩人はやって来て言った「マヌよ！[われら兩人は]汝を祈献したいのです」と。「何によって？」と[マヌは言った]「この牡牛によって」と[兩人は答えた]「そうするがよい」と[マヌは言った]それ(牡牛)が[犠牲として]殺されたとき、その音声は逃げ出した。

1.1.4.16 それは、ほかならぬマヌの妻であるマナーヴィーの中に入り込んだ。そして、彼女が述べている[音声を]聞きつづけているあいだ、阿修羅・羅刹らはずっと押しつづきされつづけていたものである。すると、その阿修羅らは互いに述べ合った「実にこれにより、いっそうの害悪がわれらにもたらされる。なぜならば、いっそう人間の音声は語るから」と。そしてキラータとアークリは言った「実にマヌは信仰を神とする。現に今、われら兩人は[そのことを]確かめよう！」と。さて、兩人はやって来て言った「マヌよ！[われら兩人は]汝を祈献したいのです」と。「何によってか？」と[マヌは言った]「まさにここにいる妻によって」と[兩人は答えた]「そうするがよい」と[マヌは言った]彼女が[犠牲として]殺されたとき、その音声は逃げ出した。

1.1.4.17 それは祈献の中に、祈献用容器の中に入り込んだ。そして彼ら兩人はその[音声]をその場所から退治することができなかった。この阿修羅殺し・敵殺しの音声は発声する。このように知っている者に対して、彼らはこの音声を響きわたらせる。すると、彼の敵たちはさらに悲惨な状態になる。

1.1.4.18 [ゆえに]彼は[碾き石を]打ち合わせる『汝は蜜のごとき舌をもつ雄鶏なり』(VS.1.16a)と[唱えて]実に彼(雄鶏)は神々にとっては蜜のごとき舌をもつものであったが、阿修羅らにとっては毒のごとき舌をもつものであった。『[かつて]神々のために存在した汝は、[今こそ]われらのために存在せよ！』と[彼は唱える]彼はこのように唱える『液汁と滋養⁶⁴を呼べ！われらは汝によりて戦いにつぐ戦いに勝利せん！』(a)と。これに関して、不明瞭なものは存在しない。

1.1.4.19 次に、箕をとる『汝は雨によりて生長せり』(VS.1.16b)と[唱えて]なぜならば、これ(箕)が葦で作られていようと籐で作られていようとイグサで作られていようと、[それらはいずれも]雨によって生長させられたものだから。またなぜならば、雨はこれら[の草本]を生長させるから。

1.1.4.20 次に、[播鉢から箕の中に]焼供を注ぎ出す『雨によりて生長したものは汝に気づくべし！』(VS.1.16c)と[唱えて]なぜならば、これらは雨によって生長したから。

として解釈すべきである。Jamison訳“Manu has śraddhā as his deity”が正しく、湯田訳「実にマヌは神を信頼している」は、Eggeling訳(‘god-fearing’)に引きずられた誤訳。但し、ここでの「信仰」は、「(神々への)歓待」をも含む広い意味に解されるべきである。śraddhā-を‘hospitality’とする解釈については：Cf. S. W. Jamison, *Sacrificed Wife/ Sacrificer's wife (Women, Ritual, and Hospitality in Ancient India)*, 1996, pp. 174–184. また、H. W. Bodewitの見解にも注意されたい：“a term which does not only mean faith or belief but also the positive attitude towards sacrifice and their performers” (*Light, Soul and Visions in the Veda*, Poona, 1991, p. 27). さらに、ヴェーダと仏典における用法については：Cf. H-W. Köhler, *Śrad-dhā, in der vedischen und altbuddhistischen Literature*, Wiesbaden, 1973.

⁶⁴ ṛj-「液汁」とūrj-「滋養」は、このように相補的な概念として用いられる。Cf. J. Gonda, “The Meaning of Vedic Ṛj” (SS. VI. pt. 2, pp. 552–559).

また、なぜならば、[焼供が]米であろうと大麦であろうと、雨がそれらを生長させるから。ここで、彼は箕に対して協調を説く「互いに傷つけ合うことのないように」と[願って]

1.1.4.21 次に、[箕を用いて]脱穀する『羅刹は一掃されり。アラティらは一掃されり』(VS.1.16d)と[唱えて]次に彼は脱穀する『羅刹は撃退されり』(e)と[唱えて]ここで彼は、魔物にほかならない羅刹らをこのようにこの場所から撃退する。

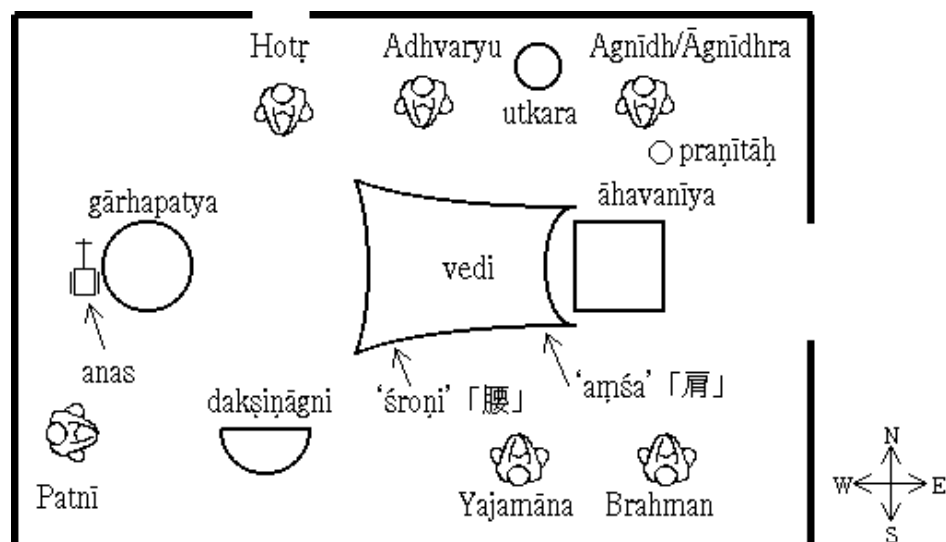
1.1.4.22 次に[脱穀された米(=玄米)を]選び出す『風が汝らを選別せよ!』(VS.1.16f)と[唱えて]実に自ら濾過されるものはこの風である。実にそれ(風)は選別されているこの一切を選別する。ここで彼は、このようにそれら(玄米)を選別する。それらがこれ(選別)に至り、彼(アドヴァリユ)がそれらを[木皿の]上に選び出すとき、(後続)

1.1.4.23 次に、忠告する『黄金の手をもつサヴィトリ神は傷穴のない手によりて汝をつかむべし!』(VS.1.16g)および『しっかりとつかまれんことを!』と。次に彼は3回脱穀する。なぜならば、祈献は3つ一組であるから。

1.1.4.24 さて、これに関してある人々は『神々のために清めよ!神々のために清めよ!』と[唱えて]脱穀する。しかし、これに関して人はそのようになしてはならない。実に焼供はこの(=特定の)神格に向けられているのである。さて、『神々のために清めよ!』と[唱える]人は、これ(焼供)を一切の神に属するものとするのである。ゆえにその人は[神々の間に]闘争を引き起こすのである。それゆえ、彼は押し黙って脱穀すべきである。(ŚB. 1.1 了)

< 付録 1 > Śālā ([祭火] 小屋) の見取図 (Iṣṭi の祭場)

(この図は) 大まかな位置関係を示すものに過ぎないが, Āpastamba-Śulbasūtra 4. 5 によれば, Vedi の東西の長さは Yajamāna の身長程度とされる)



図の作成にあたり, 以下の書を参照した .

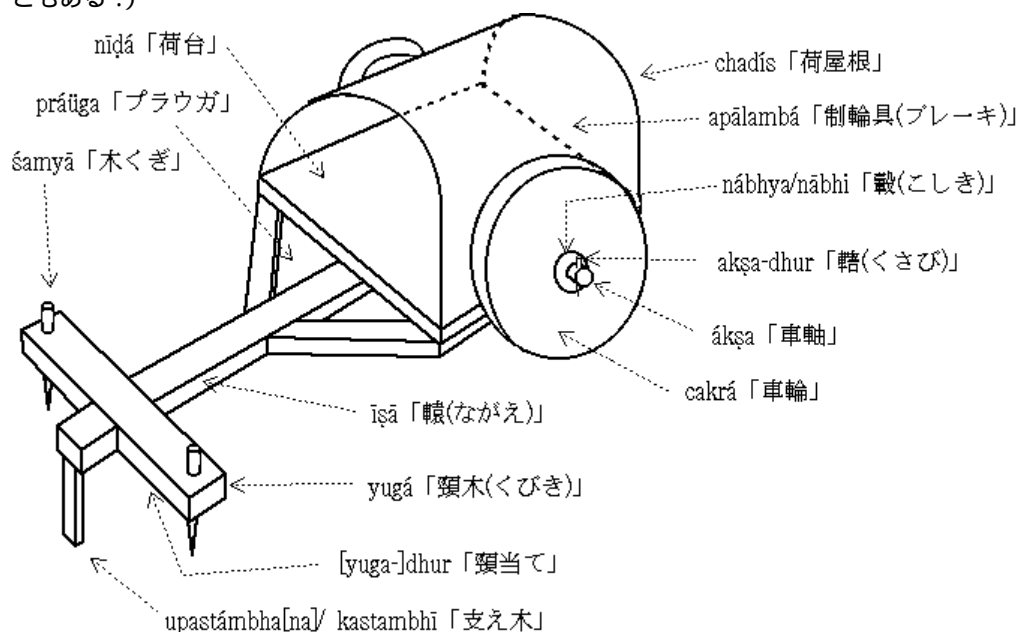
A. Hillebrandt, *Das Altindische Neu- und Vollmondsopfer in Seiner Einfachsten Form*, Jena, 1880.

矢野道雄編, 『インド天文学・数学集 (科学の名著 1)』, 朝日出版社, 1980.

Klaus Mylius, *Wörterbuch des Altindischen Rituals*, Wichtrach, 1995 (esp. 146–147).

< 付録 2 > Ánas / Śakaṭa (荷車, 牛車) の構造

(但し, yajña において用いられるのは小型の模型である . また 'havirdhāna' 「焼供の容器」と呼ばれることもある .)



図の作成にあたり, 以下の書を参照した .

M. Sparreboom, *Chariots in the Veda*, Leiden, 1985.

T. N. Dharmadhikari (ed), *Yajñayudhāni*, Pune, 1989.